

2018年4月1日（イースター礼拝）の説教（要旨）

聖書：ルカによる福音書 24 章 1～12 節

説教：「あの御言葉を思い出さない」 日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ガリラヤから主イエスについてきた女の人たちは、十字架の場面では何もできないままに、遠くから死んでいかれる主イエスを見ていました。そして、主イエスの遺体がアリマタヤのヨセフの手で、彼の用意した墓に葬られるのを見届けたのでした。彼女らは悲嘆と絶望の中で、せめて愛する主イエスのなきがらを自分たちの手で心ゆくまできれいにし、香油を塗り香料を添えて亜麻布に包み直そうと考えていたのです。それだけが彼女らに残されたただ一つの慰めでした。ところが、週の初めの朝早く、墓に行ってみたところ、主イエスの遺体が見当たらないのです。いったいどういうことなのか、彼女らは途方に暮れていました。

しかし、その時そこに突然、輝く衣を着た二人の人が現れ、恐れおののいて顔を伏せている彼女たちに語りかけて言うのです。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない」（5～6 節）。この天の御使いとおぼしき二人は、彼女たちが愛する主イエスをたずね求めている方向が全く間違っているということを告げたのです。御使いたちは、主イエスは死者の中にはおられない、主イエスは生きておられるというのです。彼らの告げた言葉は、弟子たちと初代教会の人々の信仰と生活を支える合言葉となっていきました。

主イエスは生きておられるとは、主イエスは死んだと思っていたが、まだどっこい生きていたとか、主イエスは不死身だから大丈夫だ、などということではありません。まだ生きているというだけなら、いずれいつかは死んでしまうということで、そこにはやはり死の陰がさしているのです。けれども、ここで御使いが「生きておられる」というとき、それは主イエスが本当に死なれたこと、しかも最も恐ろしい死を死んでくださったこと、私たちの身代わりとして神の怒りと審きをご自分の身に負ってくださったことを決してあいまいにはしてはいないのです。そのようないわば本当の死を死んでくださった方が、その死をもって私たちの罪と死を滅ぼし、復活して生きておられるというのです。私たち人間の罪と死の力に勝利しておられるというのです。

私たちが生きるという場合も同じです。単に息をしているというだけでは、生きているとは言えないのです。罪の問題、死の問題を克服してこそ、つまり罪の奴隷とならず、死の陰におびえることなく生きることができてこそ、私たちは真に生きていると言えるのではないのでしょうか。私たちがそのように真に生きることができるよう、主イエスは十字架で私たちのために死んでくださり、復活して私たちのために罪と死の力に勝利してくださったのです。この方につながれて、私たちは生きることができるようです。

十字架で死なれた主イエスは復活して生きておられる、罪と死に勝利されて生きておられる。だから、このお方を私たちの思い出の中に閉じ込めてはならないのです。主イ

イエスは先だって働いておられ、新しい御業を始めておられるのです。

そのことに気づくように、御使いたちは女の人たちに、「まだ、ガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出さない。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか」（6～7 節）と語りかけるのです。御使いたちが語ったことは目新しいことではありません。初めて耳にしたことでもないのです。主イエスがすでに語っておられたことです。ルカによる福音書を振りかえってみても、主イエスはすでに3度にわたって、ご自分が人々に捕えられ、殺され、三日目に復活することになっていることを予告しておられました（9：22、9：44、18：32～33）。ただ聞いたけれども分からなかった、あるいは分かろうとしなかったのでしょうか。けれどもよく分からないなりに、記憶のどこかにひっかかっていた言葉だったに違いありません。あの言葉を今こそよく思い出せ、と言われるのです。

そこで、彼女たちは主イエスがかつて語られた言葉、教えていただいた言葉を思い出したとあります。もともと、それで彼女たちはすぐに主イエスが復活されたことがよく分かり、喜びに満たされたかと言うと、まだそうは書かれていません。しかしながら、主イエスの語られた言葉を思い出すということは、決定的に大事なことでありました。

次の段落には、その日の夕方、失意と落胆のうちにエマオの村へ帰っていく二人の弟子たちに、主イエスが近寄り一緒に歩んでくださったという印象的な話が記されています（13～35 節）。彼らの場合、復活の主イエスが実際そばに来ておられるのに、全然気づきませんでした。しかし、最初のうち彼らの話すことに耳を傾けておられた主イエスが、途中から「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」と言われ、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたりご自分について書かれていることを説明」していかれま（25～27 節）。その話を聞くうちに、彼らは心が燃やされていき、やがて夕食を共にした食卓で、ようやく目が開けて、そのお方が復活の主イエスであり、主イエスが生きておられることが分かったというのです。

あそこでも大事なことは聖書の言葉、主イエスが語っておられた言葉を思い出したということです。繰り返し聞いてきた御言葉が、ああそうなのか、そうだったのか、と示される時が来るのです。胸につかえていたものがストンと落ちる時がくるのです。分からなかったことが分かる時がくるのです。その言葉が私の糧となり力となり喜びとなるのです。そのようにして、私たちは復活の主イエス、生きて私たちと共に働いておられるお方に会っていくのです。